

NIHONJIN NO WASUREMONO
日本人の忘れもの
 第2部 忘れもの 28

手書き文字



杭迫柏樹
 書家

京都は街中でも、
 路傍でも、
 郊外の景勝地でも、
 いたるところで美しい、
 ゆかしい書に出会えます。

自分を見失わずに
 生きた人こそ文化の推進者

武者小路実篤さんのこの一文は、人と書の関係に語っています。手書き文字の美しさは、それほどに大切なものだと思いますが、この各党首の



「機械化の時代」などと言われますが、実は、いつの時代もそうであったように、歴史上の人物も、平和でのんびり暮らしていた人など知りません。大切なのは、「忙中の閑」の心境で、都会の真ん中に住み、毎日日々の生活に忙殺されながら、自分を見失わずに生きた人たちが、偉大な文化の推進者であったことは、古今東西共通であります。

「手書きの文字には魂が宿る」を実感した

現在の境遇にグチを言うのはやめましょう。さて、「手で文字を書く」という文化が、急速に衰えつつある時、私は意外な場面に直面



王羲之「定武蘭亭序一韓珠船本一」(台東区立書道博物館蔵)

スローガンを見て、皮肉にも「最も高尚なものから、最も低俗なものが生まれるのは、仏の側に生臭坊主がいるのと同じ道理だ」と喝破された高村光太郎さんが思い起されます。

現代は、「喧嘩の時代」「病める時代」

しました。忘れもしない、あの2000年9月11日に起きたニューヨーク同時多発テロの直後、ニューヨークの全ての街角のビル、手とどく限りの壁に、英語(あたりまえですが)で、親の消息をたずねる家族たちのピラが貼



書「懸起」杭迫柏樹

戦後、日本人は物の豊かさと引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千の都・京都から温故知新的知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

きょうの季寄せ (一月)

一月も三日過ぎけり
 樹にからす
 老風堂木機



今年もう6日になる。元旦に声を聞き、あるいは見た鴉を「初鴉」と呼んでいる。「庭つ鳥」鴉はかつて、暮らした中の生き物だったので「初鴉」と詠まれている。身近な故が増えて犬も暮らして共にしているとはいももの、「初犬」とは詠んでいない。猫も然りである。歳時記季語立項の話である。(文・岩城久治)

「きょうの心伝」募集

宮脇次郎
 会社役員(京都市中京区/63歳)

命をかける

聚楽第跡から当時の石垣が発見され、現地説明会に行ってきた。

聚楽第は、関白となった豊臣秀吉が天皇を補佐するために、京都に公邸として構えた安土桃山時代の広大な豪華な城郭である。石垣の遺構は聚楽第本丸の南側の一部と説明され、見学地点から約60m下の土の中に整然と並んでいた。石垣の延長線上には、マンションや住宅が見える。住宅の下に、昔の栄枯盛衰が眠っていた。1年足らずで造営された城郭は8年の歳月を経ただけで取り壊され、遺構はほとんど残っていないはずの幻の城郭である。石垣から聚楽第のスケールを連想すると、秀吉の天下人としての絶大な権力が偲ばれる。たった1年で完成させた力や富は想像を絶し、石工や大工は秀吉の命を人生や命をかけて成し遂げたように思う。今の時代に人生のすべて、命をかけることは何か。秀吉は権力者になるために命をかけていた。時の総理大臣の「命をかける」はむなしく聞こえた。

「きょうの心伝」募集
 ●あなたの思「日本人の忘れもの」は何ですか？暮らしの中で忘れられない、と思う日本人の心の素直で、伝えない京都に残る心遣いなどを寄せて下さい。京都新聞社で選考、選考された場合があります。原稿は返却いたしません。タイトル(12文字以内)と本文(400文字以内)、郵便番号、住所、氏名(匿名は不可)、職業、年齢、電話番号を明記し、〒604-8577 京都新聞COM「きょうの心伝」係まで。
 Email: wasuremono@mb.kyoto-np.co.jp
 Fax: 075-26212200

●日本人の忘れもの第2部「バックナンバー」は、京都新聞ホームページでご覧いただけます。
http://kyoto-np.jp/kyo_np/info/new/

醍醐寺 五大尊像



真価に
 挑む

半導体モルディング装置 世界シェアNo.1

TOWA株式会社

本社・工場/京都市南区上鳥羽上調子町5番地
<http://www.towajapan.co.jp>